

記号論的観点からのエージェントについての考察 ：パースの進化的宇宙論における目的と指標性との関連で

佐古 仁志（東京交通短期大学）

発表要旨：

本発表の目的は、記号論の観点、特に、パースの進化的宇宙論における目的概念と指標性とに注目することで、エージェントについて考察することにある。

田中ら（2024:47-53）が指摘するように、近代以降、生物学ではラマルクへの批判に代表されるように目的論が排除されてきた。しかし、サイバネティクスや自己組織化理論のような目的指向性を中心に据える科学研究の進展とともに、生物学に限定されることなく広く科学研究において目的概念は使用される、あるいは、場合によっては必須のものと考えられている。特に、進化の総合説を拡張した進化生物学の関連分野においては、目的概念がエージェント（行為主体）の行動の選択にとって重要な役割を果たすと論じられ始めている（田中ら 2024, Tomasello 2022）。

他方で、パースはその進化的宇宙論でダーウィニズムを称賛しつつも、ラマルキズムについても好意的にとらえ、それらを総合する形で、目的指向的な進化的宇宙論をいち早く 19 世紀後半に提唱している（佐古 2013）。

そこで本発表では、まず、進化生物学における目的とエージェントの関係について、Tomasello(2022)の議論を中心に検討する。それからパースの進化的宇宙論における指標性（indexicality）の役割について考察する。これは、Gava(2014)が指摘するように、パースの 1880 年代における形式論理学への考察が、パースの指標概念に大きな変化をもたらすとともに、その進化的宇宙論に影響を及ぼしたと考えられるからである。そのうえで、パースの記号論の観点から、指標性が現在性（いまここ性）と努力という形で知覚とかわり、それが自己意識を生じる手掛かりとなる論じている Stango(2015)の議論を参照する。そうすることで、広く使用可能な記号論的なエージェント概念の提示を試みる。

Gava, Gabriele. (2014) *Peirce's Account of Purposefulness: A Kantian Perspective*. London and New York: Routledge

佐古仁志（2013）「パースにおける「進化」概念とそのあらたな解釈」『ゲーム化する世界』叢書セミオトボス 8: 202-214

Stango, Marco. (2015) “‘I’ Who?: A New Look at Peirce’s Theory of Indexical Self-Reference.” *The Pluralist* 10, no. 2: 220–46

田中泉吏・鈴木大地・太田紘史（2024）『意識と目的の科学哲学』慶應義塾大学三田哲学会叢書

Tomasello, Michael. (2022) *The Evolution of Agency: From Lizards to Humans*. New York: MIT Press. （『行為主体性の進化：生物はいかに「意思」を獲得したのか』高橋洋訳、白揚社、二〇二三年）